

書 評

津曲敏郎. 『北のモノ・コト・ヒト—こ
とばと博物館の出会い』北海道大学出版
会, 2022年, 438 p.

落合いずみ*

著者は言語学者だが本書は言語学の専門書ではなく、シベリア、サハリン、中国東北部に分布する北方諸言語、特にツングース語族とそれら言語を話す人たちの言語・文化的背景を自らの著作をつうじて概観する著作集である。著者は「私がかかわってきた言語学の分野も言語学プロパーの中心的な部分よりは、むしろ中心からちょっとずれた周辺的な部分、関連領域というか、文学とか歌とか民族文化とか、そういったことと言葉との関係に、より多くの目をむけてきた…」と述べる (pp. 370-371)。

本書は1 北方言語概説, 2 危機言語, 3 調査旅行記, 4 書評・紹介・序文, 5 北海道大学言語学研究室, 北海道大学総合博物館, 北海道立北方民族博物館連載巻頭言等エッセイ, 6 退職記念講演ほかを主題とした6章からなる。各章内において、または章をわたって重複した記述が散見されるという難点はあるが、北方の言語・文化に不慣れな読者にとっては読書内容の再復習という効果もある。著者が「今までどこかで書いたり話したりしてきたことですので、またあの話か、と思う方もあるかと思いますが、まあ、同じこ

とを繰り返すのは年寄りの特権」(p. 372)と述べているとおりでである。以下、各章を概観したうえで評者の所感を記す。

第1章では北方言語を概観するが重点はツングース語族(エウエンキー語, エウエン語, ソロン語, ネギダル語, ウデヘ語, オロチ語, ナーナイ語, オルチャ語, ウイルタ語, 満州語の10言語からなる)にある。アムール川流域を中心とした地域からシベリア、樺太に分布する消滅の危機に瀕した言語である。地理的に中国またはロシアに属している。これら言語の類型的特徴を述べたあとで、優勢言語の中国語またはロシア語の影響を受けた点を挙げている。またツングース文化にゆかりの深い語である「セイウチ」「チョウセンニンジン」「シャマン」についても考察している。

強い印象を受けたのは山でのチョウセンニンジン採りにおける特殊な言語の使用である。山ではウデヘ語ではなく中国語由来の表現を用いる。たとえばニンジンの場合は「Baŋcui! (棒槌)」(p. 97)と叫ぶ。また、これは朝鮮における記述だが、山で用いる隠語のうち6語が漢語、10語が満州語起源である。ウデヘ族にしても朝鮮族にしても獲物採りでは外来語由来の隠語を使う。それは北奥マタギの山言葉にアイヌ語由来のことが多いこと[金田一 2004: 240-247]を想起させ、聖域での命がけの行為では、普段使いの言葉が禁忌となるため外来語に置き換えた可能性が読み取れる。

第2章は危機言語の観点から北方少数言語を概観する。ツングース諸語についてい

* 帯広畜産大学人間科学研究部門

ば、ロシアまたは中国という大国のもと、生活の近代化に曝され、使用言語もロシア語・中国語に置き換わりつつある。これら北方少数民族言語が失われてしまう前に、それらの言語を調査し、記録し、保存することが急務であると説く。作業はまず無文字の言語を文字化することから始まるが、このような活動には言語学者のほかに、訓練を受けた少数民族自身が自ら関わるようになってきた。

しかし危機言語の気運は衰えたといわなければならない。危機言語気運の高まりは1991年のLSA Endangered Language Symposiumに端を発し、1994年に日本言語学会「危機言語」小委員会が発足したが、16年後の2020年に解散した。言語学という学問において危機言語は、生成文法という主流の隆盛が過ぎたあとで、新たな主流を探して辿り着いたテーマのように感じられる。それが世界各地において少数言語が優勢言語に飲み込まれて失われていくという時勢と合致したのである。危機言語の隆盛が過ぎた今、言語学は何を次の主流としていくのだろうか。津曲氏が危惧するように、「言語学は過度に専門化し細分化されて、総合への意欲に欠け」「オタク化」(p. 153)していくのだろうか。これとは逆に、著者が主張するように「一つの専門に凝り固まらない、総合的視野と柔軟な適応力をもった、バランスの取れた言語学者の育成」(p. 152)が求められるのではないか。そして著者が専門家に対して苦言を呈しているように「研究者・学生を含めた、いわば新参者を狭い縄張り意識で排除しないほしい」(p. 149)。

第3章では著者自らが出向いたフィールド調査地点を紹介する。まず中国国内に位置するビートル・ガチャという鄂温克族(ソロン語またはエウエンキー語の話者)の村、内蒙古自治区に位置するオルドス地帯、中口国境に位置するヘジェン(ナーナイ)族の集落、アムール川流域のナーナイ族の集落、ビキン川流域のウデヘ族の集落である。このほかにデルス・ウザーラを伴ったロシア人アルセーニエフの踏査についても紹介している。

著者が最も長く深く関わった言語はウデヘ語である。カンチュガ氏という最良の調査協力者との出会いがあった。自らの母語であるウデヘ語に愛着をもち、消滅の危機に瀕した言語を調査・記録する意義を理解し、その言語を説明する能力を備えた稀有な人物である。著者はカンチュガ氏と共著で『ウデヘ語自伝テキスト』『ウデへの二つの昔話』等を出版した。著者とカンチュガ氏の関係は言語学者・少数言語話者の組み合わせとして最良であったろう。

第4章は著者による書評・紹介・序文などを収集する。まず北方諸言語の入門書として『月刊言語』の特集「北方の諸言語」(1983年11月号)と「北方研究の現在」(1992年7月号)を推薦している。書評などとして以下が収められる。ロバート・アウステリッツ著『ギリヤークの昔話』(1992)、池上二良著『ウイльта語辞典』(1997)、『満州語研究』(1999)、『北方言語叢考』(2004)、呉人惠著『危機言語を救え!—ツンドラで滅びゆく言語と向き合う』(2003)、『コリヤーク言語民族誌』(2009)、佐々木史郎著『シベリアで生

命の暖かさを感じる』(2015), 吉岡乾著『な
くなりそうな世界のことば』(2017), 小坂
洋右著『アイヌ, 日本人, その世界』(2019),
黒田信一郎著『ギリヤークの社会構造』, 光
村図書出版『飛ぶ教室』第3号(2005秋
「特集 神沢利子の世界」), 司馬遼太郎著『街
道をゆく 38—オホーツク海道』(2005), 津
曲敏郎訳『増補改訳 ビキン川のほとりで—
沿海州ウデヘ人の少年時代』(2014).

書評を著した書籍の内容は言語学に限られ
ず, 民族誌, 文化人類学, 社会学など多岐に
及ぶ。これらの中で特筆すべきは, 池上二良
氏である。池上氏の著作については3本の
書評を著した。そのことに池上氏の研究に
対する敬意が読み取れる。その書評中に池上
氏の言語研究に対する見解と津曲氏の意見が
述べられている箇所では, 評者が共感するもの
を引用する。「諸言語間に見られる構造の一致
や類似の全体的な解明には『言語類型論』の
みならず, 比較言語学(すなわち親縁関係)
や地域言語学(言語接触)の観点から考察す
ることが必要であると念を押している。言語
類型論が言語学の一つの潮流となりつつある
中で, 歴史的経緯という実質を離れた『類
型』が一人歩きすることにいち早く警鐘を鳴
らしたものであろう。」(p. 268)

第5章は津曲氏の北海道大学言語学研究
室時代, 北海道大学総合博物館館長時代, 北
海道立北方民族博物館館長時代における回想
録等を収める。ちなみに本書の題目『北のモ
ノ・コト・ヒト—ことばと博物館の出会い』
は, 北方民族博物館友の会季刊誌 *Arctic
Circle* に収められた館長巻頭言「北のモノ・

コト・ヒト」に基づくものである。

本章に登場するナーナイ族のデルス・ウ
ザーラ氏とウデヘ族のヤコフ・トロフィーモ
ヴィッチ氏を取り上げたい。ウザーラ氏は黒
澤明『デルス・ウザーラ』(日ソ合作映画)
の主人公である。天然痘で親族を失った孤独
な生い立ちの主人公はロシア人アルセーニエ
フに出会い, 彼の踏査隊に協力するようにな
る。踏査中のある日, 彼等はアムール虎に出
くわした。神聖な動物として撃つてはいけな
いことになっている虎をデルスは撃ってしま
い, 自責の念にかられる。その後, 視力の衰
えに絶望するようになる。アルセーニエフは
視力が悪くても使える高性能の銃を彼に贈っ
たが, その高級品携行があだとなり殺害され
る。著者によるとトロフィーモヴィッチ氏は
デルス・ウザーラを彷彿とさせる人物だとい
う。彼は村への参観者を先導する仕事をして
いた。ある日, 氷が割れて水没しかかったス
ノーモービルを何とか引き上げたが, その無
理がたたって亡くなってしまった。2人とも
高性能の銃にスノーモービルという物質文化
の受容が彼らの死の要因となったといえる。
少数民族の言語文化の多様性を今, 研究・記
録しなければ, 人類の貴重な財産が永遠に失
われてしまうという危機感に研究者がかられ
るだろうことは理解できる。しかし近代化に
浴した研究者が少数民族に関わるというこ
とは, 少数民族側に何らかの変化を強要するこ
とでもあるということ, その変化が必ずしも
良い方向に働かないことを深く心にとめてお
かなければならない。

第6章は「コトノハ考」と退職記念講演

を収録する。講演録からウイлта語のアクセントに関する考察を取り上げたい。著者は樺太から釧路に移住したウイлта族の北川源太郎氏についてウイлта語のフィールド言語調査をおこない、その成果としてウイлта語のアクセント位置が予測できるようになった。後ろから 2 番目のモーラにアクセント核があり、そこが母音や子音だけからなる場合はひとつ前のモーラにアクセント核が移るという規則を見出したのだが、この考察は師匠の池上氏から評価されなかったと述べる。本書は再評価のきっかけを多くの言語学者に与えるだろう。

最後に、ツングース諸語とそれらの言語を話す人々についての入門書として本書を手にとってほしい。そして本書集録の書評などで紹介された書籍などへと、さらに北方諸民族とその言語・文化へと興味は広がっていくことだろう。

引用文献

金田一京助. 2004. 『古代蝦夷とアイヌ』平凡社.

松田素二・フランシス・B・ニャムンジョ・太田 至編. 『アフリカ潜在力が世界を変える—オルタナティブな地球社会のために』京都大学学術出版会, 2022 年, 452 p.

阿部利洋*

本書は、5 年 2 期にわたる大型科研プロ

* 大谷大学社会学部

ジェクト（「アフリカの潜在力を活用した紛争解決と共生の実現に関する総合的地域研究」2011–2016 年, 『アフリカ潜在力』と現代世界の困難の克服—人類の未来を展望する総合的地域研究』2016–2020 年）の最後に出版された成果論集である。日本とアフリカから 100 名を超える研究者が集結した共同研究の成果としては、既に和文 5 巻組 [太田 2016], 英文 7 巻組 [Matsuda 2021] のシリーズ論集が出版されており、そこでの多様な各論を踏まえた本書は「プロジェクトの創設から中核となって共同作業を推進してきたコア・メンバーと、それを継承して未来につながり世代のメンバーによって、その議論を発展させた」ものと位置づけられている (p. 27).

長期にわたり多数の研究者が関与する共同研究では、アフリカ潜在力というキーワードがあらかじめ定義されることはなく、「紛争解決と共生実現、環境保全や格差是正といった、今日、地球規模で『問題化』しているイシューに対して、アフリカ社会が他社会との交流や葛藤をとおして創造してきた対処能力を、人びとの生活の現場に注目しつつ取り出し、人類社会に共通の資産としよう」(p. 14) という緩やかな共通認識のもとで進められた。

ここには、①「アフリカを含む現代世界が有効活用できる知識・情報は何かという問いに対するアフリカ発の答えを提示する」志向とともに、②「異質な存在が対話をとおして何かを創造する機会を触発する」ねらいも込められている。エドワード・キルミラが

「ローカルな知識や実践を、単なるオルタナティブな言説としてではなく、魅力的な言説として、どのように活用できるか（中略）『アフリカ潜在力』という考え方に深く沈潜し、それを継続することが重要である」（p. 364）といい、フランシス・ニャムンジョが「『アフリカ潜在力』のレポーターは計り知れないほど豊かになる」（p. 401）方途を指し示すのは、このキーワードが、アフリカ側の研究者たちにとっても持続的な謎の源泉となり、新たな思考を喚起するものであったことをうかがわせる。以下、各章の内容を短く紹介する。

第1章「認識論的相対主義を恐れること勿れ—アフリカ哲学を『普遍主義』のわなから解放する」では、アフリカ哲学という視点・ジャンルが理論的・方法論的に直面するジレンマはアフロセントリズムと認識論的相対主義にあり、それを乗り越えるヒントが認識論的多様性にあると論じる。これは、上記①に該当するアフリカの独自性に普遍的な意義を読み込む際に、論者が共有すべき理論的な共通項を示すものと考えられる。

第2章「潜在的な文化的ポテンシャルを活性化し社会的問題の解決にとり組む—アフリカの大衆文化がもつ開放的な政治思想の可能性」は、アミルカル・カブラルとワンバ・ディア・ワンバの思想を取り上げ、「アフリカの人びとが新植民地主義的な国家によって支配されている」（p. 90）現状を乗り越える指針を提示する。とりわけワンバが目じたパラヴァー（共同体の全員が参加する問題解決のための会議）について、その独特なコ

ミュニケーション形式の活用可能性を指摘する。

第3章「自由な移動と親族のホスピタリティー—地球規模の課題に対処するために必要な連帯を生み出すアフリカ潜在力」は、アフリカにおいて移動する「他者を保護することは義務であり、ホスピタリティーは贈与として与えられる」（p. 123）という規範的観点から、アフリカ人の連帯の経験／イデオロギーを考察する。とくに若者の移動とその処遇は、将来的な潜在性に関わってくるという視点は示唆的である。

第4章「パラヴァーとコンセンサス—アフリカ社会において相克はいかに解決されるか」では、コンセンサスの創出という観点からパラヴァーの意義が掘り下げられている。パラヴァーでは、当事者間の和解と共同体の紐帯・一体性の回復を主目的とし、近代司法における賠償や罪状の確定は副次的とされるが、紐帯・一体性を回復・強化するために用いられる手法や型が、合意に到達した際の「深い達成感」（p. 162）とともに、臨場感あふれる描写で説明されるのである。

第5章「ケニア北西部における地域住民によるローカルな平和構築の潜在力—ウェスト・ポコットの事例より」は、紛争解決においてローカル・オーナーシップを制度化することの難しさに着目する。この章ではポコットを舞台とする民族紛争をめぐる取り組みを検討するなかで、活動に対する正統性の付与が成否を左右するカギであると論じる。

第6章「食欲で残忍な首長たち—南スーダンの人びとは、なぜ最悪の指導者に対して

寛容なのか」は、アフリカ潜在力という概念に対して、他の章と比べるとやや異質なアプローチを採用している。南スーダンの新国家建設は、政治家の果てしない汚職腐敗と紛争の再発によって、国民に対する裏切り(p. 208)に帰結した一方で、そうした政治家に対する人びとの奇妙な「寛容性」(p. 320)が現出している。ここでは、肯定的で創造的でないと思われる現実からアフリカ潜在力の陰陽を考える必要性も示唆されるのである。

第7章「共感と共有を通じた知識形成」は、文字を用いない口承に着目することから、アフリカの伝統社会での教育と知識について論じる。そして、口承・口述をベースとする「Presentational (発表的な) 知識」は、古典的な西欧認識論を支えてきた「Representational (写実的な) 知識」よりも、情報化時代の教育の可能性に示唆を与えるとする。

第8章「サハラ以南アフリカにおける子どもと子ども性—開発問題の視点からみるその実態と未来への提言」では、アフリカの子ども性を脆弱・制約・窮乏・生存の危機といった側面から認識するアフロ・ペシミズムの問題を指摘する。一方で、質の高い教育を実現することでアフリカの子ども性を再構築する条件が整っていない現状についても批判的に論じている。

第9章「ねだりと贈与—トゥルカナとアフリカ都市の『贈り物』に関する試論」は、アフリカへ赴く側からすれば悩ましく否定的に経験されがちな「ねだり」の仕組みを仔細に検討することをつうじて、「与え手と受け

手双方が合意に至る協働のプロセス」という観点から再認識する (p. 306)。ねだることが正当な行為であり、堂々に行なわれる社会では、自己の生の意味や孤独の質も、私たちの社会におけるものとは大きく変わってくるだろう。

第10章「ごみの価値化と『アフリカ潜在力』—大量消費社会において忘れられた物の『生命』とその生まれ変わり」は、編者が「未来につなぐ世代のメンバーによって、その議論を発展させた」章の代表例となっている。砂漠化問題に直面するニジェールのサヘルの荒廃地に都市ごみを投入し、そこに集まるシロアリの諸活動を活用し緑化を進めた20年に及ぶ実験の発展と成果が、具体的に描出される。

第11章「『アフリカ潜在力』という観点から見た在来性およびアフリカの現実の新しい捉え方」では、アフリカ(人)のロマン化・本質化を回避したうえで、「在来性の概念は、オルタナティブな社会的ビジョンにもとづいてアフリカ的なものとは何かを考えるために役に立つ」(p. 361)という立場を採用する。このようにして、次章の議論と理論的な接続が図られている。

第12章「セシル・ジョン・ローズ—帝国主義的統治における『完全な紳士』」は、不完全性 (incompleteness) とコンヴィヴィアリティ (conviviality) というキー概念を用いて、ケープタウン大学におけるセシル・ローズ像の損壊・撤去・移転・修復に至る一連の過程を論評する。政治的緊張のなかで慎重を要する事例を、正義とは異なる実践的指針か

ら描出する筆致からは、上記のキー概念を現実の困難に適用する可能性を鮮やかに示すものとなっている。

第13章「アフリカ潜在力の源泉としての日常性と生活世界」では、第2期プロジェクトの代表者でもあった編者が、自身のフィールドや日本社会との接点を論じつつ、アフリカ潜在力概念の特徴として把握される7つの観点一（複数性や流動性、不完全性、異種結節力など）一を析出し、冒頭①に該当する多様な議論を整理している。

さて、アフリカ潜在力とは何か、という問いは、この表現を前に常についてくるものである。しかしながら本書を手にとれば、その問いに正面から取り組んでいるようにみえる。認識論的多様性（第1章）、パラヴァー（の仕組みと目標）（第4章）、不完全性とコンヴィヴィアリティ（第12章）といった概念が、それぞれ注意深く、かつ繊細に、何らかの現実が対一対応の処方箋とならない論理で差し出されていることにも気づかされる。上記①の体裁をとる議論であっても、それは②に接続するように展開するのであり、逆にいえば、②の論理が①の形式として顕現しているように読めるのである。

一方で、上記①を集中的に検討しようと読み始める読者にとっては、意外に感じる章もいくつかあるだろう。序章、第4章、第11章、第12章、第13章（そして部分的には第1章と第7章）はそのような関心に対応する内容となっているが、それ以外の章は、どちらかといえば上記②を志向しているからである。そこでは（アフリカ人としての／ア

フリカ社会のアイデンティティを前提として）何らかのアフリカ潜在力をどのように実現するか、という議論が進められ、あるいは、不完全性をつうじた相互作用や「異種結節力」という視点を前提としたうえで、それらを現実に応用する過程が示される。そうした議論は、アフリカ潜在力の意味を論理的に明示化する段階をスキップして、その表現に触発された議論や活動から、遡及的にアフリカ潜在力という表現の射程を再認識させるものだといえるかもしれない。その意味で、本書には10年間の研究プロジェクトのまとめとともに、すでに進行し始めた派生的な研究の一端が開示されているのである。

引用文献

- Matsuda, M. general editor. 2021. *African Potentials: Convivial Perspectives for the Future of Humanity*, Vol. 1-7. Bamenda: Langaa RPCIG.
- 太田 至総編集. 2016. 『アフリカ潜在力』第1巻 - 第5巻. 京都大学学術出版会.

杉村和彦・鶴田 格・末原達郎編. 『アフリカから農を問い直す—自然社会の農学を求めて』京都大学学術出版会, 2023年, 466 p.

黒田末壽*

アフリカの農の潜在力と新たな可能性をとらえなおす

近代化の観点からみると、サハラ以南のアフリカ（以後サハラ以南を省く）は世界の中

* 滋賀県立大学人間文化学部名誉教授

でも顕著に遅れた地域である。世界の最貧国リストにはずらりとアフリカの国々が並ぶ、それは農業においても同じで、本書も土地生産性は低く1990年代からまったく伸びていないという。私の経験でも旧ザイール（コンゴ民主共和国）の赤道州を最初に訪れた1974年から最後の2008年までの間にあった変化は、ジャポニカ系の陸稲栽培が少数ながら定着したぐらいで農法の変化はみえていない。むしろ、植民地政府も独立後の各国政府も世界銀行やFAOの支援を受けて農業の近代化を試みてきたが、それは挫折の繰り返しであった。本書はそのことを「近代化を拒否するアフリカ農村」の言葉で要約している。

しかし、著者らは、「もっとも『停滞している』とされる広大な農牧・焼畑地域の農業・農村を主たる対象にして、その地域自立的・環境保全的な潜在力に着目し、新たな可能性をとらえ直す」という。そのためにアフリカ農業・農村の特異性を検討する方法的概念として、上山春平の比較文明論的研究から生まれ、伊谷純一郎を始めとする生態人類学者たちが肉付けした「自然社会」の概念を採用する。そしてこの作業は同時に、アフリカへ向けられてきた近代農学知に基づく言説の批判となると宣言する。

この批判は、I・イリイチやV・シヴァの思想をとおして、近代農学とおなじく生産主義と画一化を進行させてきた産業社会とそこに生きる私たち自身へ向けられている。これは、アフリカの農に関わる研究を集大成し、そこから思想を取り出す大胆な試みの書といえる。

本書の構成

本書は10人の農学者と生態人類学者の論文で構成されているが、4部構成でねらいがわかりやすい。第1部の序論で編者たちがアフリカの農をとらえる仮説と理論構成および分析概念を提示し、2章でアフリカの生態史の概括、3章で農業近代化プロジェクトの失敗要因の分析がされている。第2部でアフリカのさまざまな地域の農村研究の成果が展開されている。重要な点は、ここで取り上げられた民族や複数民族の共同社会が、現金経済や市場経済に巻き込まれ変貌しながらも、根底の部分で共同消費の文化、流動性、生業の複数性、富の平準化機構など、編者らのいう「自然社会」の特質を保っていることである。つまり仮説の実証部になっている。そして、第3部が近代農学の批判と相対化、第4部が総括部といってよく、内発的イノベーションや発展可能性を論じ、自然社会の農学としての在来知と、アフリカの農が産業主義を越える力になる期待が語られている。各章にはそこでの議論をI・イリイチやV・シヴァなどの思想や政治学等で裏付けする、あるいは深化するコラムが設けられ、理解が進むよう工夫されている。紙幅の関係から、以下では本書の議論の骨格を作る序論を中心に、本書の論理構成を紹介する。

国家に捕捉されない農民

本書の論理の出発点は、アフリカの農民が近代化を受け入れない要因を分析したG・ハイデンの議論である。世界のどこでも権力の形成は多数の小規模で独立した農村生産者

たちを支配することから始まる。ところがアフリカ農民はいまだに国家や他の社会階層によって捕捉されていず、近代国家と資本制経済から自立している。その要因は、家族の安定した再生産（生存と生殖とコミュニティの一員としての成長）が優先される小農的生産様式と、情の経済（economy of affection）と要約される親族関係やコミュニティでの相互扶助、共同消費の文化にあるという。どちらの要因も生産力や経済力の向上といった国家権力や市場の要請に農民を動員する障害になるのは容易に理解できる。小農的生産様式は（拡大）家族の最低限の必要を安定して満たすことを優先する（サブシステムズ経済）点で平等主義的である一方、利潤追求やリスクの高い新技術の受け入れを困難にする。情の経済の実例は、タンザニアのトンゲ集落では収穫物の40%が訪問者の歓待で消費されるという掛谷誠 [1974] の研究が有名だが、ハイデンはたとえば、政府から補助を受けて新しい生産手段を購入しても、裕福な隣人に転売して婚資や学費や儀礼や施し等のコミュニティの要請に対応するような行為が頻繁に起こることをあげている。

文明史の視点の導入による仮説

編者らはハイデンとの議論をとおして、上山春平 [1966] の「社会編成論」を援用して比較文明論的観点から再解釈し、アフリカの農民が国家に捕捉されていないのは、アフリカの農村社会が「農業社会」以前の「自然社会」的な特質をもつためではないかという仮説を構築した。上山は、文明の発展段階を

自然社会・農業社会（本書ではアグラリアン社会と呼ぶ）・工業社会の3段階に分ける。自然社会から農業社会への転換は、農耕の出現ではなく低地灌漑農業の成立に置き、それを（古代）農業革命と呼ぶ。なぜなら低地灌漑農業は環境改変によって生産力を飛躍的に高め人口の集中と専制的国家権力の誕生と連動して、農業のみならず社会構造の大変化をもたらすからである。国家権力が農民を支配し生産方法と生産物をコントロールして、穀物重視、単作化と画一性、農業の専門化、労働団としての農村共同体の形成、定住、犁農耕が発生する。穀物の単作は、J・スコット [2019] によれば国家の誕生の条件である。穀物がもつ収穫期の斉一性、計量と運搬の容易さ、貯蔵性、高カロリーの性質が、権力が吸い上げる徴税対象としてうってつけであり、単作は課税と収奪を効率化する。徴税制度は文字と官僚組織を生み出し文明を肥大させる。最初いくつかの限られた地帯で生じた農業革命はやがて世界の大部分に波及し、農民が権力に統制されるアグラリアン社会が世界を覆った。アグラリアン社会の農業は、産業革命以降、近代農業革命を経て、今日のインダストリアルな農業に進化するが、それらの方向は多収性作物・単作・生産力向上で一貫している。

しかし、植民地化以前のアフリカの農村住民はアグラリアン国家に継続的に支配されたことがなく、今日の農耕や農村社会のあり方にも複数の生業複合や住民の高い流動性や主食作物の複数性と多様なアグラリアン農業と反対の特性を維持している。つまり、ア

フリカの農村社会はアグリコリアン社会の段階を経験していない。そのことがアグリコリアン社会の農業の延長である農業の近代化やインダストリアル農業に至る困難さの主因であり、編者たちは、これが、東南アジアなどでは成功した緑の革命が、アフリカではなかなか進まない文明史的な理由と考えられるという。

「自然社会」の要素と執拗な残存

とはいえ、アフリカの農村社会の特質を明らかにしていくには「自然社会」の概念をもっと深めないといけない。編者らは伊谷学派の生態人類学に注目する。彼らは生産面だけでなく、生産物の分配や贈与や共同消費といった消費の社会性についても詳細な研究をし、生業形態にかかわらず平等主義と富の平準化機構が存在すること、農耕・狩猟採集・牧畜・漁労の生業も環境に応じて複合的に営まれたり相互転換すること、移動や社会組織の流動性の共通性を見出している。これらによって編者らは、狩猟採集民社会・農耕民社会・牧畜民社会のそれぞれも同じ自然社会の一派に過ぎないという視点をもちこむのである。そうすると、現代アフリカ農村に残るつぎのような自然社会的要素のリストができる。

居住地や社会のあり方の流動性と分散性、生業の複合性と多様性・非画一性、農法や作物の多様性・非画一性、焼畑と混作、分与の経済と消費の共同性、富の蓄積の恒久化の不可能性である。こうした特徴によって、おなじく農業をしているようにみえても、生産第一主義のアグリコリアン農業とコミュニティの共

同消費が重要であり市場経済に回収されないアフリカ農民の農業は、社会学的にも農学的にも別物であることになる。

一方で、こうした農村社会にもイネやトウモロコシの単作が拡がりつつあり、徐々に近代技術を導入し生産を上げて市場経済に参入する動きもあるが、おもしろいことに、そういう変化の中でも全面的にアグリコリアン的農法になるのではなく、非画一性、多様性、複合生業などの性質は執拗に残るといふ。11章で「イノベーションのアフリカの特質」では、市場経済に巻き込まれながら換金作物の単作化には突き進まず、生産全体が多様化している事例を報告し、その事態は農民が市場経済と同時にサブシステム経済にも軸足を置いているからと説明している。

アフリカの農から何を学ぶのか

第4部では締めくくりとしてアフリカの農から構築される自然社会の農学の希望が語られ、人間がものの生産手段になっている状態からの脱却、相互扶助のネットワークの中で生きる焼畑農耕民の姿、人と人の関係を富として生きる組織原理などが語られている。しかし、あえていえば、ここは人間の生き方と自然社会の農学の「解説」に終わっている感がある。私たちの世界における実践の姿としては、福岡正信の自然農法と環境再生型農業の拡がりや簡単に言及されているだけである。ここをもう少し書いて欲しかった。私はそのことを不満に思うのではない。現代社会の中でのこういうことの実践はむずかしく、福岡がそうだったように宗教者のような信念

が必要な気がするからだ。しかし福岡のおだやかな顔を思い出すと、できることを友人とぼつぼつやっていけばいいという気もする。そこにイリイチのコンヴィヴィアリティがあることも確かだろう。

いくつかの課題

私は、本書の視点と論理展開に異論は無い。アフリカの農村社会を文明史的スケールでとらえる視点を提供した画期的な著作であり、人類進化論に携わる立場からすると、本書は、伊谷の平等原則論の発展的展開とも位置づけられる。編者らの出身講座である農学原論からすると、アフリカの農村社会の特質を思想として引き出す試みともいえるだろう。

しかし、いくつかの反論が出てくるだろうことも確かである。たとえば、生業の複合性や転換は1960年代までの日本の農民や漁民にも普通にあった。猟、耕作、林業、炭焼きを時と場合によって複合的・交代的に生業にしていたからこそ、資本の要請に応える出稼ぎ者への転身も容易にできたといえることができる。国家に捕捉された農民であっても、百姓といわれたように何が生業（正業）かわからないような、鍛冶屋、線路の敷設工、大工などを兼業する人もいた。明治・大正時代の村是には農民が多様な方法で経営の安定を図ったことが書かれている。

混作も多くの地方の焼畑、たとえば熊本の五木や四国の椿山では普通だったし、私たちの滋賀での焼畑の師匠は、クワ畑を焼いてカブとダイコンを播き再生するクワとの混作をした。私は子どものときに父の影響でキノ

キノの下にクコや市場で売る野菜を数種作っていたし、今でも作業手順の邪魔にならない限り野菜は2、3種以上の混作にする。土地の利用率を上げ、適度の湿度を保つ混作は農耕の粗放化ではなく集約化で自然発生的にも起こりうる農法で、オーストラリア生まれの『パーマカルチャー』[モリソン・スレイ1993]という教科書もある。だから、自然社会に特有とは必ずしもいえない。また、江戸期の農書には不作の被害を最小限にするために多品種のイネを植える（混作ではないが）ことが奨励されていたし、明治初期に農務省が全国から集めたイネの品種は4,000種を越した。それは農業の近代化の中で淘汰されていくのではあるが、1960年頃までは最低、早生・中生・晩生の3品種以上を田に植えるのが一般農家のやり方だった。本書の本筋に関係ないとはいえ、これらの点の整理を図る必要があるだろう。

より大きな課題は12章で杉村が述べているように、アフリカの農学を学ぶ現場に自然社会の農法をどうもちこむかである。また、在来農法の合理性を認めないからこそ農業の近代化を進めようとするエリートたちが、「農業革命を経ていない自然社会」のタームを差別的なものと誤解する恐れもある。それをどのようにして避けるのか、著者たちに工夫と実践を期待したい。

引用文献

- 掛谷 誠. 1974. 「トンゲ族の生計維持機構—生活環境・生業・食生活」『季刊人類学』5(3): 3-90.
モリソン, B.・R. M. スレイ. 1993. 『パーマカル

チャー—農的暮らしの永久デザイン』田口恒夫・小祝慶子訳、農山漁村文化協会。
スコット, J. C. 2019. 『反穀物の人類史—国家誕生のディープヒストリー』立木勝訳、みすず書房。
上山春平. 1966. 「社会編成論」川喜田二郎・梅棹忠夫・上山春平編『人間—人類学的研究』中央公論社, 73-99.

柳澤雅之・阿部健一編. 『No Life, No Forest—熱帯林の「価値命題」を暮らしから問う』京都大学学術出版会, 2021年, 290 p.

山越 言*

本書は、南アジア、ラテンアメリカ、アフリカの熱帯林を生活世界とする人々の現在の姿を、丹念な現地調査によって描いた9つの章で構成される、読み応えのある良書である。また、下記に述べるいくつかの点でたいへんユニークな書となっている。

まずは刺激的なタイトルである。No Forest, No Life とは、森なくして命なし、生き物の生息（あるいは森林に依存して暮らす人々の生活）にとっての森林の重要性を主張する際によく使われる警句だが、本書の書名は、生活なくして森はない (No Life, No Forest)、とこれをひっくり返す。高圧的な森林保全政策に対して人々が行なったスコット流の抵抗 [Scott 1985] の事例集か、あるいは森林形成や維持に対する人間活動のポジティブな側面 [山越 2003] についての事例集かと、ある種の期待をもって読んだが、その予想はよ

い意味で裏切られた。

本書の編者、柳澤、阿部による序章では、FAO の統計に基づき、南アメリカとアフリカの急速な森林減少および、「もはや伐採すべき熱帯林がなくなった」(p. 4) 東南アジアの熱帯林について語られる。背景としての「熱帯林問題」は、明確に意識されている。このような急激な熱帯林の減少を止めなくてはならない、森に依存する人々の暮らしを守らなくてはならない、と立ち上がり闘うところであろう。ところが、本書の編者たちはここで立ち止まり、迷い、考え続ける。「本書は、熱帯林問題に『答え』を出すのではなく、むしろ『問いかけ』をしている本である」(p. 2)。「安易に結論を出さずに、考え続けることが大切だと思っている」(p. 6)。

本書を構成する9章は、アフリカに2章、東南アジアに3章、ラテンアメリカに4章が割り振られている。それぞれ独立した論文の体裁は保っているが、おそらくは編集方針を反映して、各章それぞれ10編程度の少ない引用文献、冒頭から地域の描写が始まり理論等の紹介が最小限な導入部、個人名つきの登場人物の丹念なライフヒストリー描写、道路や機械、会社・組合といった非人的アクターへの注目、数値・図表よりはテキストによる描写・論証、参与観察・インタビューによる人類学的記述に著者の存在が積極的に書き込まれている、といった共通点が多く、統一的な印象を与える。結果として、論文集でありながら、とても読みやすく、あたかも短編小説集のように流れに任せて読み進めることができた。個人的には、ラテンアメリカ文

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

学の短編集の読後感に近いものを感じた [たとえばバルガス＝リョサほか 1995]。本書の平易で統一的な編集方針は、硬い論文形式では失われがちな、フィールドワークの魅力の表現方法について、ひとつの模範例を示している。とくに「作品」を読みやすく一般読者に提示する手段として秀逸であり、編者らの意図にかかわらず今後なんらかの評価を得るかもしれない。

このような編集方針のもと、各章では、固有名をもつ登場人物（著者を含む）がいて、舞台としての森がある。歴史があり、政策があり、外部からの介入がつぶさに描かれる。編者が提示した本書のメッセージ「lifeを見ようということにつきる」(p. 277) のとおり、世界各地の熱帯林での「人間らしい暮らしや生き方」(p. 277) が丁寧に記述されている。そのうえで、それぞれの熱帯林問題を前に、松浦直毅（第1章）は「長期にわたって継続的に彼らに寄り添う姿勢を重視し」(p. 35)、近藤宏（第4章）は、「誰かとともにある意識に基づく新たな考え方」(p. 123) を模索し、柳澤（第5章）は、変容の主体である地域の人たちを中心に置いた「新しい協調のメカニズムを作り出していく」必要性を説き (p. 153)、石丸香苗（第9章）は、「多数の善良な倫理観が機能する社会構造こそが必要」(p. 255) と構想する。みなそこで立ち止まり、悩み、考えている。

評者は数年前、類書の編集を手がけたことがあり [山越ほか 2016]、編者目線で本書の意義に共感するところが多かった。前掲書では、アフリカの野生動物保全の文脈で、グ

ローバルな問題への解決法として普及したローカルな対話の場（参加型保全という手法）に注目し、現状を批判的に記述したのちに、地域の人々の意向を対話によって把握・実践していくことの重要性を前向きに指摘した。まさに本書同様、「未来の物語のシナリオを『そこに住む人』と一緒に書く可能性」(本書 p. 10) についての書であった。地域の人々との対話によって、森や動物の保全を考えることは、しかしながら「保全の物語」を補完するとは限らない。本書の第1章（松浦）、第2章（坂梨健太）、第4章（近藤）の事例にみられるような、開発によってもたらされ、究極的には彼らの資源を損なうであろう道路を柔軟に受け入れ利用する態度や、第5章（柳澤）の地域住民と伐採業者との協働は、地域固有の状況に応じたローカルな判断の多様性として興味深い。これらはグローバルな「保全の物語」からすれば、あるべき筋から外れた困った事例なのかもしれない。「参加型」の仕組みによってせつかくアクターとして招き入れた住民の「正しくない」意思決定を信頼するのか、という外部の保全アクターが抱える逆説が露呈するところである。地域の人々が描く「それぞれの熱帯林の書きかけの未来の物語」(p. 10) と、グローバルな運動との齟齬や協働が次のトピックとして待ち構えているだろう。本書はしかし「道は途上で、『答え』はまだない」(p. 6) という立場にあえて留まる。いっぽうで、このまま森が減り続けていいのか (No Forest, No Life)、という問題に対して、近い将来待ったなしの対策を迫られる状況も容易に想

像できる。ゆっくり未来の物語を紡ぐ時間が果たしてどれだけ残されているだろうか。

編者の努力に対しては賛辞を送りたいが、いくつか残念な点もある。本書の副題にある「価値命題」についての議論は、本書では提案こそされているが不十分であると感じた。「使用価値」「交換価値」に対する「関係価値」という概念は興味深く、本書でも適切に導入と議論が行なわれていたとしたら有益であったろう。第6章（湖上ゆかり）や第8章（藤澤奈都穂）が描いた、LifeとForestが多様性のもとで調和する事例は、それ自体がユニークで興味深いと思うが、前述の「安易に結論を出さずに、考え続けることが大切」という方針のためか、とくに強調されずに埋没している印象である。また、本書が「答え」ではなく「問いかけ」を重視する書だとしても、それでもなお、「答え」につながる何らかのアイデアについての議論が欲しかった。たとえば前述の近藤の「誰かとともにある意識に基づく新たな考え方」（p.123）や、石丸の「多数の善良な倫理観が機能する社会構造」（p.255）について、もっと深く知りたかったと思う。

丸山眞男は、ユダヤーキリスト教系列の「つくる」神話との対比で、古事記を「なる」神話として位置づけた〔丸山1998:353-423〕。われわれが「つぎつぎになりゆくいきほひ」という日本の歴史意識の古層に、そ

の刻々となりゆく「いま」ととらえる傾向に、現在も囚われているとするならば、立ち上がって闘わず、立ち止まっていまを描き、悩み考える本書の姿勢は（第7章（鈴木遙）を例外として）、極めて日本的であるといえるかもしれない。このような日本の自然観に依拠した立ち位置は、グローバルな環境問題のローカルな現場において、有意義な貢献を成しうるだろうか。日本人の編者・著者により編まれた本書が広く読まれ、熱帯林問題の解決に資するオルタナティブとして、意味ある研究・運動・実践につながることを期待したい。願わくば熱帯林の大半が失われてしまう前に。

引用文献

- Scott, James C. 1985. *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*. New Haven: Yale University Press.
- バルガス＝リョサ, マリオ・パス, オクタビオ・オカンボ, シルヴィーナ・アストゥリアス, ミゲルアンヘル・パチエーコ, ホセエミリオ. 1995. 『ラテンアメリカ五人集』安藤哲行ほか訳, 集英社文庫.
- 丸山眞男. 1998. 『忠誠と反逆—転形期日本の精神的位相』ちくま学芸文庫.
- 山越 言. 2003. 「ギニアの森の成り立ち—景観に埋め込まれた生態史を読む」『アジア・アフリカ地域研究』3:237-248.
- 山越 言・目黒紀夫・佐藤 哲編. 2016. 『アフリカ潜在力5 自然は誰のものか—住民参加型保全の逆説を乗り越える』京都大学学術出版会.